

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：32727

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862209

研究課題名(和文) 幼児の事故に対する父親と母親の認識と予防教育プログラム構築に関する研究

研究課題名(英文) Study on fathers' and mothers' recognition of infants' injuries and design for preventive education programs

研究代表者

山下 麻実 (YAMASHITA, ASAMI)

横浜創英大学・看護学部・講師

研究者番号：40515863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：幼児を養育する父親と母親の子どもの不慮の事故に関する実態を明らかにし、今後の予防教育について検討を行った。

その結果、不慮の事故が子どもの死因の第1位であることの認識は父親の方が低く、父親と母親では実行している子どもの事故に対する予防行動も異なっていた。また、生活環境や育児用品の変遷により、親が遭遇した事故の発生原因も変化し、親は事故に関する情報の発信をインターネットから望んでいた。今後、親に向けた子どもの事故に関する予防教育として、父親と母親の役割を考慮し、ICT(Information and Communication Technology)を活用することの有効性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The author aimed to clarify how infants' fathers and mothers understand the infants' unintentional injuries and discuss preventive education programs for the parents.

The results showed that fathers were less aware than mothers that the unintentional injuries were the leading cause of childhood death. The fathers' behaviors taken for preventing their children's injuries were found to be different from the mothers' behaviors. The causes of infants' injuries the parents actually met with were found to be changing because of the changes in the environments and childcare goods. The parents wanted to know useful information about infants' injuries through the Internet. This study suggested that information and communication technology (ICT) should be effectively used for designing preventive education programs in consideration of the respective roles of father and mother to equip the parents to understand infants' accidents and injuries.

研究分野：医歯薬学

キーワード：子どもの事故 事故防止 予防教育 父親 母親

1. 研究開始当初の背景

1960年から現在まで、1歳から4歳までのわが国における子どもの死亡原因は「不慮の事故」によるものが第1位であり、全死亡数の約3割を占めている。そのほとんどが家庭内で起きており、不慮の事故による子どもの死亡は少子社会が進んでいるわが国において、小児保健上の重大な課題である。

また近年、核家族化、少子化、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の困難などの背景により、家庭教育力の低下が問題化し、「改正教育基本法」や「改正育児・介護休業法」が施行され、子育て期間中の働き方を見直し、仕事を続けやすい仕組みづくりと父親も子育てができる働き方の実現を目指している。その結果、現代では「イクメン」という言葉を新たに生み、今では誰もが知る言葉になっている。しかしながら、父親が育児に参加する一方で、父親の子どもの事故に対する意識をはじめとする実態など明らかにされていない。

家庭環境の変化や家庭教育力の低下が問題化されている現代において、父親、母親、そして保育の専門家である保育士の事故に対する認識と事故予防を明らかにし、事故の予防教育のプログラム構築をすることが看護者に求められている。

また、子どもの不慮の事故を予防することは、父親と母親が支えあい、子どもたちの健やかな育ちの基盤である家庭の教育力向上に向けた現代的な取り組みにも示唆が得られると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、父親、母親、保育の専門家である保育士の事故に対する認識と事故予防

を明らかにし、現代の家庭における子どもの事故の予防教育のあり方を検討することである。

3. 研究の方法

システマチック・レビュー、質問紙調査、アクションリサーチ

4. 研究成果

1) 家庭における乳幼児の事故の現状と看護における今後の課題を考察するために、システマティック・レビューを行った。その結果、44件の対象文献のうち、乳幼児の事故の実態を調査したものが大半であった。また保護者と表現されていても、ほとんどが母親の子どもの事故に対する危険認識や母親にむけた予防教育であり、父親に関する研究は2件のみであった。父親の事故に対する認識や予防策など明らかにすることが急務であることが示唆された。

2) 保育所および幼稚園における安全管理を把握するために、自動体外式除細動器（以下AED）の設置の実態調査を行った。その結果、回答が得られた449施設のうち、AEDを設置している施設は121施設（26.9%）であった。AEDの設置は、幼稚園が認可保育所、認証保育所、認可外保育所と比較して有意に高かった。また、AEDを設置している121施設のうち、2施設がAEDを2台、119施設は1台の設置であることが明らかになった。

3) 幼児を養育する父親と母親が経験した子どもの不慮の事故の実態を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。その結果、父親母親ともに共通して経験した不慮の事故の内容は、溺水、不慮の窒息、誤飲、転落、やけど、交通事故で

あった。自由記述による経験した代表的な不慮の事故では【ベビーカーに荷物を掛けすぎてベビーカーごと転倒した】【前かがみになったら抱っこ紐から子どもが頭から落ちそうになった】【エレベーターの扉の戸袋に子どもの指が吸い込まれた】などがあった。エレベーターをはじめとする自動ドアの普及など生活環境の変化により発生する事故や、ベビーカーや抱っこ紐など育児用品の普及から発生する事故など、現代における子どもの不慮の事故に関する発生原因も変わりつつあることが示唆された。

- 4) 幼児を養育する父親と母親がもつ子どもの不慮の事故に対する認識を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。その結果、不慮の事故が子どもの死因の第1位であることを181人(49.6%)の父親と母親が認識していた。父親と母親別にみると、不慮の事故が子どもの死因の第一位であることを認識している父親は47人(35.6%)であり、母親は134人(57.5%)であった。家庭における子どもの不慮の事故に対する認識が十分でないことが示唆された。
- 5) 幼児を養育する父親と母親が日常的に行っている安全対策の現状を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。その結果、父親・母親ともに最も多く、自分の子どもに日常的に行っている安全対策の具体策では【子どもに危険なことを伝える】という子どもに向けた

事故予防教育であった。次いで、父親は【自転車や自動車に乗る時にはチャイルドシートを装着する】という自動車や自転車に同乗中の交通事故に関する対策であり、母親は【ふざけてものを食べない】という窒息に関する対策であった。この結果は、父親と母親が子どもを主に養育する環境が異なることが背景にあると考えられ、父親と母親の役割を考慮した効果的な事故予防プログラムを検討していくことが示唆された。

- 6) 幼児を養育する親が子どもの不慮の事故に関する情報の入手方法を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。その結果、半数以上の親が活用している子どもの不慮の事故に関する情報の入手方法は、テレビ(75.3%)次いで、インターネット(62.7%)の2つの方法であった。また、今後、親が希望する子どもの事故に関する情報の入手方法について、半数以上の親が幼稚園または保育所(園)(63.3%)、次いで、テレビ(62.2%)インターネット(54.0%)の順であった。半数以上の親が、子どもの不慮の事故に関する情報をインターネットから入手しており、さらには、今後もインターネットから、情報の発信を望んでいることが明らかになった。近年、スマートフォンの普及によって、インターネットがより身近なものになり、生活に占める割合は増している現状に起因していることが推測される。今後はICT(Information

and Communication Technology)の進化によるライフスタイルの変化を考慮した効果的な事故予防プログラムを構築していく必要がある。

7) 乳幼児を養育する父親と母親に対して、傷害予防対策の支援を目的に、アクションリサーチを行った。行政および保育所や幼稚園をはじめとする乳幼児施設などと多職種連携し、乳幼児期に家庭で起こしやすい事故の実態や防止策を検討し、以下の内容を実施した。エッセンシャルオイルを使用した物づくり(虫よけスプレー・ハンドクリーム・アロマキャンドル・ルームフレッシュナーなど)や心肺蘇生人形を使用しての一次救命処置法の研修会を行い、子育て相談と組み合わせた。エッセンシャルオイルを使用した物づくりについて、参加者からは「子育てで毎日疲れており、いい香りを感じながら、リラックスできた」一次救命処置法の研修会では「事故に対する知識をもつと、正しく事故を防止できると感じた」などの感想が聞かれた。また、子育て相談と組み合わせたことで、相談者の子どもの家庭環境や発育状態を聞くことで、よりタイムリーで個別性のある事故防止策が提示することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

(1) 山下麻実他；乳幼児施設における小児一次救命処置に関する基礎的研究，小児保健研

究，第 75 巻第 1 号 p.14-p.21，(査読有)

(2) 山下麻実他；保育所・幼稚園における子どもの収容人数と自動体外式除細動器(AED)の設置および使用に関する調査，日本健康医学学会雑誌 第 25 巻 p. 271-276，(査読有)

[学会発表](計 6 件)

(1) 山下麻実他；家庭における乳幼児の事故に関する研究の動向 2001年から2013年に発表された国内文献の分析，日本小児看護学会 第 24 回学術集会，タワーホール船堀(東京)2014.7

(2) Asami YAMASHITA, et al ; Review of literature on children's home accidents in Japan , 8th ICN International Nurse Practitioner/APNN Conference, Scandic Marina Congress Center (Helsinki, FINLAND) 2014.8.

(3) Asami YAMASHITA, et al ; How parents recognize accidents happening to their infants and how they take safety measures against the accidents , 2nd World Congress On Health & Medical Sociology , Hilton Grand Vacations at the Flamingo (Las Vegas , U.S.A) 2016.9.

(4) 山下麻実他；幼児を養育する親が経験した子どもの不慮の事故の実態，第 57 回日本母性衛生学会 学術集会，品川プリンスホテル(東京)2016.10

(5) 山下麻実他；幼児を養育する父親と母親がもつ子どもの不慮の事故に対する認識と日常的に行っている安全対策の現状，第 36 回日本看護科学学会 学術集会，東京国際フォーラム(東京) 2016.12.

(6)山下麻実他；乳幼児を養育する親の傷害予防に関連した情報の入手方法における基礎的調査，日本小児看護学会 第 26 回学術集会，京都国際会議場（京都）2017.8.（採択通知あり）

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

山下 麻実（Asami YAMASHITA）

横浜創英大学・看護学部・講師

研究者番号：40515863